書き抜き読書ノート 17	2006 年 8 月 30 日

プレハーノフ著「歴史における個人の役割」を読む

－偉大な人とは何かを考える－

(１)必然性を自覚することと、もっとも精力的な実践行動とは立派に両立するものだ。P.20

(２)歴史は人間によってつくられ、またそれだから個人の活動は歴史のなかで重要なものとならざるをえない。P.31

(３)個人がその才能をしめすことができるのは、彼が社会でそれに必要な地位を占めるときだけである。P.59

(４)個人がしばしば社会の運命に大きな影響をあたえる。だがこの影響はその社会の内部構造によって、またその他の社会に対するさまざまな関係によって規定される。P.62

(５)広い活動分野は「創始者」だけにひらかれているのでもなければ、偉大な人々だけにひらかれているのでもない。

それは見る目をもち、聞く耳をもち、自分の隣人を愛するすべての人々にひらかれている。

偉大という観念は相対的な観念である。道徳的な意味では聖書のことばをつかえば、「自分の生命(いのち)を友のためになげうつ」人はだれでも偉大である。P.88

プレハーノフ著、木原正雄訳

「歴史における個人の役割」岩波文庫、岩波書店 1958 年 10 月 5 日刊

－ 2006 年 8 月 30 日記－